



東京YMCA

2016 10月号

発行所 公益財団法人東京YMCA 発行人 廣田光司
135-0016 東京都江東区東陽2-2-20 電話 03-3615-5562

URL <http://tokyo.ymca.or.jp>

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

障がい児・者支援 30年

ご協力に感謝

東京YMCAインターナショナル・チャリティーラン

2016年度 参加・協賛企業・団体

(順不同、敬称略)

【全国協賛】

三菱商事株式会社
富士通株式会社
ステート・ストリート・コーポレーション

【参加・協賛】

シティグループ・ジャパン・ホールディングス合同会社
株式会社カーギルジャパン
富士ゼロックス端数倶楽部
ジョンソンコントロールズ株式会社
キャセイパシフィック航空日本支社
岡谷エレクトロニクス株式会社
ビザ・ワールドワイド・ジャパン株式会社
東京・フロストバレーYMCAパートナーシップ
上田ハム短資株式会社
東京トヨペット株式会社
フットマーク株式会社
R.R.Donnelley Japan株式会社
JPRF (一般社団法人日本ラケットボール連盟)
株式会社アサヒ・エコキャリー
アメアスポーツジャパン株式会社
山崎製パン株式会社
FVイーストジャパン株式会社
キッコーマン株式会社
ライオン株式会社
株式会社ダイエー
株式会社昭和電気産業
コストコホールセールジャパン株式会社
有限会社レッドウィング
株式会社恵愛

国際青少年センター東山荘 (日本YMCA同盟)

ワイズメンズクラブ国際協会 在京ワイズメンズクラブ
しのめYMCAこども園

東京YMCA江東コミュニティーセンター 江東YMCA幼稚園

東京YMCA東陽町コミュニティーセンター

東京YMCA西東京コミュニティーセンター

東京YMCA山手コミュニティーセンター

東京YMCA国際ホテル専門学校

東京YMCA南コミュニティーセンター

第30回大使に 川合俊一さん



川合俊一さん
84年、88年オリンピック出場。全日本バレーボール元キャプテン。現在は日本ビーチバレーボール連盟会長。タレントとしても活躍中。

30周年おめでとうございます。当日は雨でお目にかかれませんでした。多くの方の善意でこの大会が続けられてきたことは、本当にすごいです。中には30年間欠かさずに参加されている企業もあると聞きました。これはぜひ応援したいと思って、今回アンバサダー(大使)を引き受けました。

障がいのある方々が、ごく普通にスポーツやアウトドアを楽しみ、生き生きと暮らせるように、皆様のご活躍を応援しています。

「東京YMCAインターナショナル・チャリティーラン」が、今年30周年を迎えました。この大会は、障がいのある子どもたちを支援すると共に、障がいへの社会的関心を高めることを目的とした駅伝大会で、1987年に東京で始まり、今年では全国20カ所のYMCAで開催されています。「ラブ・オン・ザ・ラン」を合言葉とし、年間ランナー数は1万5千人、支援額は4000万円にのぼり、毎年約5000人の障がい児・者の活動が支えられています。たくさんの方の企業・団体、ボランティアの温かな心が大きな力となつてこの大会を育て、障がいのある子どもたちに笑顔をお届けできますように、心より感謝申し上げます。

第30回となる9月22日は、荒天のため競技は中止となりましたが、36の企業・団体から参加費や物品によるご支援をいただきました。またバレーボール全日本元キャプテンの川合俊一さんは第30回大会のアンバサダー(大使)として応援くださいました。さらに150人を超すボランティアの方たちが雨の中で、会場整備や模擬店など作業にあたってくださり、感謝をもってご報告します。皆様のご支援によって今年も、障がい児のキャンプやスポーツ、またボランティアの研修などを行なうことができます。下記に、参加者の声を紹介します。これからも、共に心豊かな「福祉社会」を築けるよう、ご協力をお願いいたします。(総主事 廣田光司)

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

障がい児・者活動の声

参加者の声

鈴木 克弥さん



高校2年生の時、初めてキャンプに参加しました。それまでは1人で5日間も出かけることは無理だと思っていたのですが、高校1年の時に手術をして1年間リハビリ入院した後、新しいことにチャレンジしたいという気持ちになって、参加しました。

キャンプはとにかく新鮮で楽しかったです。初めて健康の友だちができて、たこ焼きを焼いたり、花火をしたこともいいとでした。野外料理で思い出です。よくは障がいのため大きな音や光が苦手ですが、花火はしたことがなかったのですが、ボランティアの先輩が優しく教えてくれました。障がいのある子どもたちが一緒に生活して、一人ひとりのいい所を活かせるキャンプです。一人ではなかなかできないことも、リーダーやメンバーの協力です。卒業後もほくはこのキャンプを応援したいと思い、事前の準備などのボランティアをしました。障がいの有無に関わらず、たくさんの子どもたちがこういうキャンプを体験できればと思います。

※フレンドシップキャンプは、40年前からYMCA山中湖センターで開催。現在はNPO法人フレンドシップキャンプが主催、東京YMCAは後援として指導者派遣等を行っています。

保護者の声

五味 宣子さん

振り返れば、五味姉弟がYMCAにお世話になつて25年にも及ぶ日々です。キャンプだけでなく、フィットネス、テニス、ピエノ、定例野外活動など、たくさんの活動に受け入れていただき、自分なりに楽しむことができました。おかげで2人とも体力がつき、逸太郎はそれをきっかけに競技水泳、競技スキーを始め、2011年の国際知的障害者スキー大会(INTERCOUNTRY)に出場することが出来たのです。たいへんうれしかったです。障がいのある子どもたちが、親でなくても、自分たちでできることを、自分たちで楽しんでいる姿を見ることが出来たのは、本当にうれしいことです。子どもが、知的障がい児の五味姉弟に、自分たちでできることを、自分たちで楽しんでいる姿を見ることが出来たのは、本当にうれしいことです。

我が家は、逸太郎が生まれる直前に夫が亡くなり、私の扶養家族は2人の障がい児と母と叔母3人の介護老人になりました。家族を支えるための仕事、しかし家族が待つ家には早く帰らねばならず、土日もよく子どもたちを連れて職場へ行きました。一番困るのは夏休み春休みなどです。こういう時YMCAは心強い味方でした。まだ障がい児キャンプが多くなつた時代でしたが、快く受け入れていただき、たく



(左から) 五味逸太郎さん、江里子さん、宣子さん

さん。リーダーに出会い、支えられ、親ではない体験もできました。障がいのある子どもたちが、自分たちでできることを、自分たちで楽しんでいる姿を見ることが出来たのは、本当にうれしいことです。

す。(国際ホテル専門学校 宮崎純)

赤三角

よくスポーツ選手がインタビューで「自分からプレ-をするだけです」と答えている場面を見ます。もし自分がスポーツ選手で「自分からプレ-とは具体的に何？」と質問されたら困ってしまうでしょう。自分らしいを表現するのはとても難しいことだと思います。確固たる信念を持つていない私には尚さらです。学校の現場では「YMCAらしい学校作り」とよく言われます。しかしホテル専門学校では「YMCAらしいワイ-ンの開け方」「YMCAらしいベ-トメイク」があるわけでもなく、それがYMCAらしさでもあるかもしれません。自分らしい「プレ-」とは、自信やこだわりを持って練習してきた「プレ-」なのではないでしょうか。つまり「自分らしい」とは、一生懸命続けてきたこと、大切にしたいと思つていて、大切

■ 地球市民育成プロジェクトに参加

にほんご学院留学生 ^{ダイ ミズキ} 戴 瑞希さん

→瑞希さん(前列中央)とグループの仲間たち。カルチャーナイトの準備のため、研修後に毎晩AKBのダンスをするなどし「たくさん友だちができた」という。



東京YMC Aにほんご学院の留学生である戴瑞希(ダイ・ミズキ)さんが、日本YMC A同盟主催の研修「YMC A地球市民育成プロジェクト」に参加中です。これは、環境問題など地球規模の課題に取り組み、行動を起こすことのできる青年を育成する1年間の研修で、夏に1週間の宿泊研修を受けた後、各自テーマを決めて活動をすすめ、3月に報告を行ないます。

今年は中国・韓国・東ティモールなどアジア諸国から44人が参加。御殿場の東山荘で8月29日から9月4日、ハンセン病院や在日外国人の交流施設、障がい者施設などを訪問したほか、「世界がもし100人の村だったら」をテーマとしたワークショップなど多彩な研修を受け、格差と人権、多文化共生などについて学びました。

ミズキさんは初めて参加したYMC Aの研修に大きな感銘を受けたようで、長いレポートを寄せてくれました。一部をご紹介します。

私は今回のプロジェクトに感動しました。私は世界の課題について新しい知識を得て、視野を広げることができましたし、一つの問題に対して、違う角度から観察したり、判断することも学びました。大学教授や専門家の貴重な講義を聴いたり、参加者同士で討論をする中で、私は「ユースエンパワーメントとリーダーシップ」を将来の努力目標にしようと決めました。私が考えたアクションプランに対して、コンサルタントは色んなアドバイスをくれましたし、色んな人と出会って、勉強もできて、私にとって本当にプラスになりました。

今回の活動では日本人の友だちがたくさんできたことも、私にとって貴重な思い出です。グループのメンバーと議論したり相談したりして、とてもいい関係ができました。ネイチャープログラムでは富士山麓で沢遊びもして楽しかったです。最終日のカルチャーナイトのために、3日目から毎晩みんなで一緒にAKB48のダンスを練習しました。昼間いくら疲れても、夜みんなで精いっぱい練習しました。参加者たちは皆「大家族」になり、別れるのが辛かったです。



9月10日(土)、新宿駅前で恒例の国際協力街頭募金を行いました。炎天下のもと、午前10時から午後4時の長時間に渡り、会員、ワイズメン、園児、学生、ボランティアリーダーなど、162人が道行く人に気持ちを込めて呼びかけた結果、14万6684円が寄せられました。長年親しんだ渋谷駅を離れ、新宿駅前での実施は今年で2年目となります。世界で最も多くの人が行き交うといわれる新天地、新宿での募金活動は、スペースを確保するのが困難など、さまざまな課題がありますが、昨年に引き続き、過去5年間で最多となったボランティアの方々が心を合わせて「誰かを思いやること」を体現できたと感じています。

(国際協力部 日野枝里子)

新宿駅で162人 国際協力募金

バン格拉デシュの子どもたちのため

国際協力募金はこのように使われます



・YMC Aの小学校(NEE)に通う子どもたち(写真上)。
・ダハバラ診療所で血圧を測る看護師のヘバリー・マンディーさん(写真中央)。
・NEEで学ぶ小学生(写真下)。



東京YMC Aは1990年にバン格拉デシュYMC Aとパートナーシップを締結して以来、皆様からの募金でその活動を支援しています。バン格拉デシュでは、就学児童の大半が生活のために学校から離れていくという厳しい現実があり、貧困の連鎖が深刻です。バン格拉デシュYMC Aは、子どもたちが働きながらも学習を継続できるように、柔軟なカリキュラムを持った無償の学校を運営しています。

2015年度は、寄せられた募金を用いてバン格拉デシュ各地にある10の「働く子どもたちのための学校」を継続して運営し、342人の生徒の学びを支えることができました。また、135人の生徒に3ヶ月間奨学金を支援し、就職や進学に関わる資格取得のための学習指導を行いました。少数民族の住むダハバラ地域では診療所を運営し、341人の患者を診療。医療スタッフによる保健指導や講習会も実施しました(年間参加者1,239人)。

熊本通信

熊本に派遣中の職員による現地だよりです。

震災から5か月、熊本は次の局面を迎えようとしています。9月15日に熊本市最後の避難所・熊本市総合体育館(市の事業団運営)が閉所となりました。翌16日にはYMC Aが運営している避難所・益城町総合体育館も10月末で閉所するとの発表が町長からありました。平行して町内17ヶ所、1556戸の仮設住宅建設が進んでいます。そのうち2つの仮設住宅は巨大で、テクノパーク(516戸)と木山(220戸)の団地が出来、この団地内に東日本大震災の時に設置された「地域支えあいセンター(東日本の時は、サポートセンター)」が設置され、熊本YMC Aはこの木山地区のセンターを受託することが決まりました。YMC Aとしては初めて仮設住宅のコミュニティ作りに関わることとなります。避難所運営のノウハウを生かした継続的な活動が期待されることです。

他方御船町は、まだすべての需要を満たす仮設住宅の建設計画が立たず、熊本YMC Aが運営する



↑益城町の仮設集会所「よかましきハウス」

御船町スポーツセンターの避難所も、閉鎖の見通しが立ちません。そのためもう少し避難所運営が継続しそうです。

阿蘇YMC Aは地域の災害ボランティアセンターとして、これまでに全国から3,000名を超えるボランティアを受け入れており、さらに先日の阿蘇山噴火により、新たなボランティアニーズも生まれました。また復興割や格安航空券を利用した、観光や被災地視察の宿泊も可能です。ぜひご利用いただけると幸いです。

(東京YMC A職員 秋田正人)

子育てコラム



子育てに携わる困難と喜び

『一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだら、豊かに実を結ぶようになる』(ヨハネによる福音書 12章24節)。このイエスの言葉はよく、春のイースター(復活祭)で取り上げられますが、「収穫の秋」の視点で考えてみました。収穫の秋、私たちは、豊かな実りの恵みに与えることを、当たり前のように思いがちです。しかし、

かし実際に、自然からの恵みを受けるためには、多くの犠牲や影の働きがあり、感謝して受け止める必要はあります。ご承知の通り、東京YMC Aは、保育事業を積極的に進めています。小さな命を育み、成長に寄り添う子育て支援の働きは、多くの献身的な働きによって支えられています。保育事業を円滑に運営し、充実させるためには、働き人(保育者等)が必要で、「収穫は多いが、働き人が少ない」とのイエスの言葉があります。喜び、泣く人と共に泣く、働きの人が不足しています。

働く人の喜びは、子どもの笑顔であり、保護者からの感謝のメッセージです。一人ひとりの現実に向き合い、困難と一緒に克服することができると信じています。私たちは、命を育む責任の重さに身を引締め、育児の悩みに耳を傾け、行事等の準備や運営に心を配り、子どもの育ちに一喜一憂しながら、日々の働きに確かな手ごたえを感じています。このような積み重ねによって、収穫の秋を、感謝の秋にすることができると信じます。

鶴 清忠
(芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ館長)

感謝報告

■高等学院とlibyのためのチャリティーコンサート



東京 Y M C A 高等学院とオープンスペースlibyのためのチャリティーコンサートが9月30日、霊南坂教会で開催されました。これは、東京 Y M C A 理事で高等学院の音楽講師でもあるオルガニストの飯

靖子さんが、ご子息の飯頭さんと企画したもので、オルガニストの松浦光子さん、チェロの黒川実咲さん、パーカッションの篠崎史問さん、フルートの多久和怜子さんも演奏くださり、来場者は120名ほどになりました。曲目は「G線上のアリア」などクラシックだけでなく、「リベルタンゴ」など情熱的な演奏もあり、中でもオルガンとパーカッションによるラヴェルの「ボレロ」は圧巻で、会場中が圧倒され、司会の私もしばらく言葉が出ないほどでした。

最後に生徒たちはキャンブソングを歌い（写真）、讃美歌「シャローム」を歌いながら退場しました。鳴りやまぬ拍手に胸がいっぱいになりました。libyと高等学院は、ただの居場所、ただの通信制高校ではなく、1人ひとりの複雑な思いや挑戦、保護者の胸の内など、一つ一つのドラマにじっくり寄り添う場所です。だからこそ、チャリティーの意味があります。お支えくださった皆さんに心から感謝いたします。（高等学院校長 井口 真）

■フロストバレー Y M C A より熊本大地震へ100万円

ニューヨーク州フロストバレー Y M C A から9月15日、熊本支援のために9,760ドル、東日本大震災のために700ドル、日本円で計約100万円を寄付いただきました。フ



ロストバレー Y M C A は、東京 Y M C A と37年にわたりパートナーシップを結んでいます。熊本 Y M C A との親交があることから、震災直後にフロストバレー Y M C A の基金“World Service”から5000ドルの寄付を決定。さらに現地に向中の池田麻梨子さん（東京 Y M C A 職員＝下記枠）の呼びかけに応じて多くのスタッフから募金が寄せられました（写真）。池田さんは、以前に熊本 Y M C A の会員やスタッフがフロストバレーを訪問した際の写真などを使い、震災を身近に感じてもらえるようにチラシを作成し、全スタッフにメールで配信したといひます。ご協力に感謝します。

東京－N Y フロストバレー便り

フロストバレーではスタッフトレーニングの一環として銃を持った侵入者がいた場合の対策ビデオがありサマーキャンプのリーダーを含め全員で見た。10分程度のビデオだが、その中で「RUN（走る）・HIDE（隠れる）・FIGHT（立ち向かう）」ということが教えられる。アメリカの高校に通うリーダーたちは、すでに見たことがあると言っており、アメリカは銃社会なのだという現実が改めて突きつけられる。

ちょうどサマーキャンプが始まる直前の6月12日にフロリダ州オーランドで50人が死亡する銃撃事件があったばかりだった。もしも私たちがキャンプをするこの場所が惨劇の舞台になってしまったら、と考えるとぞっとする。しかしそれが100%無いわけではないのも事実だ。「安全が最優先される」という言葉は

切実だ。

Y M C A の活動は安全を守る、という前提の中で運営されると同時に平和を作り出すという積極的な目的がある。マザー・テレサがかつてインタビューの中で「世界平和のために私たちは何をしたらいいですか。」という問いに対して「家に帰って家族を大切にしてください。」と答えた。

サマーキャンプが終わると週末のファミリーキャンプが始まる。多くの家族がフロストバレーに集まり、楽しい時間を過ごす。それは平和を作り出すお手伝いをしているようなものだ。小さな草の根運動が公正で平和な社会を作り出すと信じて、これからも Y M C A の活動が続けていきたい。

（在フロストバレー Y M C A 池田麻梨子）

「発達障がいのある学生支援」講演会
配慮しあう社会を目指して

今年4月にスタートした「障害者差別解消法」によって行政や事業者には、障がいのある方へ「合理的配慮の提供」が求められるようになりました。これを受けて東京 Y M C A 高等学院は8月28日、「発達障がいのある学生支援 ～合理的配慮ってなんだろう？～」と題し、講演会・情報交換会を行いました。

第一部は M E S A（発達障害学生就労支援研究会）代表で、明星学苑法人本部の企画課長として活躍されておられる村山光子氏をお招きし、明星大学で発達障がいのある学生を支援する「S T A R T プログラム」を運営されてきた経験から講演いただきました。後半は参加者のみなさんとお茶菓子を囲みながら、情報交換会を行いました。

村山氏は講演の中で、「合理的配慮の考え方は、障がいとは本人の特性のみならず、社会の仕組によって障がいとされている、という考え方である」と話されました。つまり仕組みを整えれば障がいとされずになく、医療、福祉、N P

むこともあるわけです。そのため「誰でもトイレ」の設置などに代表される「基礎的環境整備」と、過度な負担をかけない範囲内での「合理的配慮」という2点が義務までは努力義務とされましたが、特に合理的配慮は、障がい者本人からの申告によって対応義務が生じる制度なので、意思表明しやすい環境整備がポイントとなると説明されました。

また、学生サポートは大学生活への適応だけでなく、医療、福祉、N P とも重要なことになってきているというお話が印象的でした。特にその連携をコーディネートする力が今非常に求められているということでした。

後半の情報交換会では、当事者の実感のこもった話や、義務教育の中学校にもかかわらず発達障がいにも訴えることが出来ないこともあるといった現状が話されました。終了後も各所で立話が収まらず、1時間程延長しましたがまだ名残惜しい様子で、切実さが伺えました。

熊本 Y M C A 災害対策本部長の神保勝己さんと、益城町の避難所の責任者・大久保和生さんが10月3日、東京 Y M C A を訪れ、管理職を対象に報告会を開催。発災以後の Y M C A の状況や日ごろ必要な備えなどについて詳しく語られた。

熊本 Y M C A が運営する益城町と御船町の施設は、もともと指定避難所ではなかったが、地震直後から住民が避難。余震の中、土足のままで押し寄せる避難者の安全を確保し、食事を手配し、赤十字や行政などと連携しながら避難所の体制を整えていったという。

メールも電話も使えない状況での安否確認、ライフラインが止まったままの保育園再開、次々と訪れるマスコミの対応、過労で心身に変調をきたす職員たちのケアなど、まさに非常事態での働きの一つ一つに多くを学ばせていただいた。

10月末で益城町の避難所は閉鎖するが、熊本 Y M C A はその後「地域支援合いセンター」を受託し、仮設住宅者支援を担うこととなった。引き続き全国 Y M C A の応援を得ながら、高齢者や障がい者など災害弱者に寄り添った支援をしていく計画である。ほかに現地でボランティアの養成や子どものケア、また阿蘇ボランティアセンターでの家庭解体作業や農作業など、今後も長期にわたり支援が欠かせない状況という。（広報室）

報告会

熊本に学ぶ、災害への備えと Y M C A の役割

誰もが通いやすい高校としての東京 Y M C A 高等学院や、発達障がい児者のスキルトレーニング

クラスの A S C A クラスや S T A R T Y、様々な違和感を持つ人たちのための居場所事業のリーダー（高等学院 井口真）

b y の重要性はますます高まっていることを感じさせられる時間でした。（高等学院 井口真）

すべての人を一つにしてください

平和文化へ移行するために

「核兵器の出現」と『地球環境問題』の二つの理由から、「戦争文化」を続ければ、もはや人類が自滅してしまいうことが明らかになつてしましました。そこで『戦争文化』を卒業し、『平和文化』へ移行することが必要になるのです。（元広島平和文化センター理事長 スティーブン・リーバー）

2009年4月に、オバマ大統領はブラハで、核軍縮の歴史的演説をしました。そして16年5月には広島を訪問し、「私の国のように核を保有する国々には、勇気を持って恐怖の論理から逃れ、核兵

兵器不使用の方向に非協力的であることや、使用済核燃料の処理が保障されない状況下での原発再稼働や輸出をしたり、他国へ攻め入ることのできる法案を制定したりしているこ

餐会で訴えました。日本が、そして Y M C A が、それを止める力とチャンスをもっている。それは、私たちの心の中にある「戦争文化」から「平和の文化」への移行であり、

器なき世界を追求しなければなりません」と語りました。この7年間で世界は核をどれだけ縮小できたのでしょうか。今世界を騒がせている北朝鮮の責任を追及するあまり、唯一の被爆国である国が核

冒頭のスティーブン・リーバー氏は、今世紀には、非常に危機の中にあり、人類が滅びることが非現実の世界ではなくなってきたことを8月の東京 Y M C A 年

お互いを大切にする「愛の文明」を作り上げるためのです。シルズを解散する時に、周りから継続して欲しいと言われた奥田愛基さんは「民主主義に顧客はいらない」と言いました。誰かに

任せるとはならず、私たち一人ひとりに行動が求められているということ。今、民主主義が危機に瀕しています。全体主義が良いなど選択する人は少ないですが、私たちが顧客になった時に全体主義は忍びこんでくるのです、ヒトラーの率いたドイツの姿は、他人事ではないのです。（総主事 廣田光司）